

# 第10回 口腔機能って何だろう？

＝ 「口腔機能（心地よい毛先刺激）」は、アルツハイマー病にも関係する ＝

北九州在宅医療・介護塾  
塾長 久保 哲郎

前回では、「口腔機能」はパーキンソン病にも関係があることについてご紹介させて戴きました。

それでは今回は、「口腔機能」の維持・向上に極めて重要な関係がある「歯みがき」とアルツハイマー病との関係についてご紹介させて戴きます。

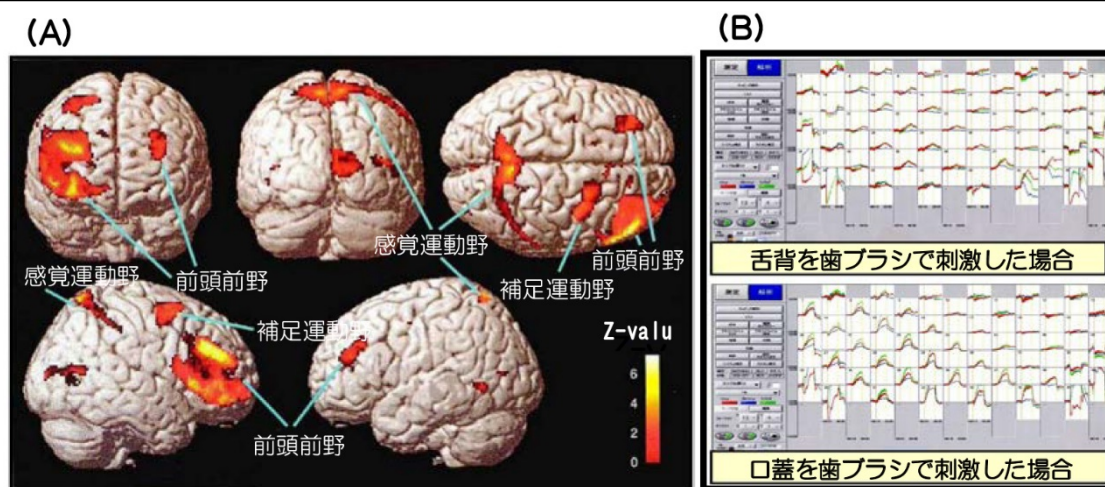
口腔内の歯、顎、舌、口蓋、頬、そして口唇には、「摂食・嚥下」等の口腔機能が円滑に行われるために、様々な口腔機能反射センサーが組み込まれています。例えば閉口反射（下顎張反射、歯根膜-咬筋反射）、開口反射、唾液分泌反射、顔面筋反射、嚥下反射、咳嗽反射、嘔吐反射等です。

これらの口腔機能反射センサーに対して、「歯みがき」をする際に“心地よい毛先刺激”を行うと、咀嚼をした場合と同様に脳の感覚運動野、前頭前野、補足運動野等に活性化がみられ（A、B）、このこと

に伴ってサブスタンスP（脳内神経伝達物質）の増大がみられ、逆にアルツハイマー病の発症原因といわれているアミロイドβタンパク質が減少したという報告（Ohnishi T et al: A new therapy for Alzheimer's disease. Geriatr Gerontol Int. 2004; 4: 123-125.）があります。

このような事例を踏まえ、日々の「歯みがき」は、“歯や歯ぐき”を含め口腔内全域（口唇、舌、口蓋、頬等）に「心地よい毛先刺激」を加えることが脳を活性化し、その結果として認知症予防や症状進行の抑制にも繋がると推察されます。

また、要介護者や認知症者の方に対しては、お食事後は勿論、お食事前の「歯みがき」は、味感覚の改善や誤嚥防止等の効果が得られるといわれていますので、ご参考にしておこなって戴ければと思います。



A: 神奈川歯科大学生体機能学講座生理学分野 水野 潤造他、老年歯学 第23巻 第3号 2008.

B: 九州歯科大学生命科学講座摂食神経科学分野 河岸 重則他、2010.